サル　犀川町内に常に生息していないが、香春岳の野猿が群れから離れて迷い込み思わぬ人騒がせをする。

シカ　以前伊良原の山中ではよく見かけたと聞く。今は数が少ないと思われるが猟師の話によれば、帝釈山や城井・伊良原の郡境山系には出没して猟の対象になっているそうである。

コウモリ　昼は洞穴や大木のうろに群居しているが夜になると餌を求めて活動する。以前は人家へ飛び込み驚かすことがあったが、最近昆虫も少なくこれも少なくなった。

ムササビ　低山の森林や大木のうろ、あるいは人家の屋根裏に棲む。四肢の間に皮膜がありこれで高い木から低い木へ滑空する。距離は三〇～四〇㍍、夜行性であるからめったに人目に付かない珍動物であるが現に犀川町にいるので特記する。帆柱の久保田剛氏方の土蔵の屋根裏に巣をかまえてもう一〇年近くなるという。子を一匹育てていたが遊んでいるうち屋根から落ち犬に捕まえられ死んだので、久保田氏はこれを剝製にし伊良原中学校に寄附保存されている。

二　鳥　類

㈠　人里近く棲むもの

スズメ　人の住む所だけに生息する。人が村を去ればいなくなる。屋根瓦の隙間などを利用し巣を作っていたが、今はそうもいかず竹藪や樹林に棲むことが多い。半益鳥。

ツバメ　渡り鳥、雀と同じく人の住む所に居る。飛行専門で歩行はできない。益鳥。

カラス　ハシボソカラス・ハシブトカラス・ミヤマカラスの三種に分けられる。犀川町にいるのは前二者である。秋ごろ群れをなして飛来する。最近農作物を荒らすこと甚だしい。害鳥。

ハト　カラスと反対にやさしく平和の象徴とされる。元来は野鳥だが社寺・公園などで人に親しむ。山に行くとキジバトの鳴くクウクウという声をよく聞く。

モズ　低山や村里に点在する林に棲む。さえずりはカン高く朝寝坊を驚かす。

ヒバリ　麦畑の少なくなった犀川町ではめったに鳴き声も聞けなくなったが、絶滅したとは思われない。

ジョウビタキ　渡り鳥の冬鳥。尾を振る習性があり、羽に白紋があり当地方では「モンツキ」と呼ぶ。鳴き声はヒッカタヒッカタ、この名がある。この鳥も最近少ないのかあまり見かけない。

セキレイ　ジョウビタキに似て尾を振る。

㈡　原野・灌木林に棲むもの

キジ　四季を通じて平地原野の明るい林に棲む。尾が長く羽も美しいので剝製にされる。

コジュケイ　中国原産。日本に移入されてから一〇〇年に満たないが急速に繁殖した。昭和十七年ごろ当地方に放鳥された。その子孫だろう山に行くと足元から飛びたって驚かされる。

メジロ　目の回りに白い輪がある可愛らしい小鳥、鳴き声もよいので飼育される。

ウグイス　春になると里に下り美しい声で鳴く。笹鳴きと呼ばれ日本

代表の鳴禽の一つ。庭先の餌台によく来る。

シジュウカラ　スズメの一種で少し小型である。神社の森などに群れをなして棲み深い針葉樹林は好まない。数は少なくなった。

カッコウ　夏鳥として渡来する。別名「カンコドリ」。モズやホオジロの巣に託卵する習性を持つ。戦後は声を聞くことが少ない。

＜その他＞

ホオジロ・ミソサザイ・カワラヒワ・ゴイサギ・マヒワ等見かけることは少ない。

㈢　山林に棲むもの

ホトトギス　夏の渡り鳥。ウグイスやミソサザイの巣に託卵する横着者である。それに反して和歌や俳句に詠まれる。本町でも時々声を聞くと思われるが英彦山に連なる野峠附近にいる。

ヤマドリ　これも標高の高い所に棲むのを主とするが、低山でもホロを打つ音ドドド……という音を聞いた人は多いだろう。

トビ　空中に円を描き舞う姿も近ごろ見ることが少ない。

キツツキ　別名ケラという。その数は少ないが時折この鳥のつついた穴を見る。

コゲラ　キツツキの一種。

ワシ　現在は全く見かけないが、三〇年前ごろまでは帆柱附近にいたと聞く。そのころのワシの剝製が伊良原小学校に保存されていたが学校が火災に遭い、惜しくも焼失したらしい。

クマタカ　猛禽類でワシにつぐ大きな鳥で秋から冬にかけて英彦山や野峠附近に飛来する。

ハイタカ　ダム環境調査により確認されている。環境庁指定の貴重種である。湛水後でも生息場所に変化は無いと報告している。

アオバズク　小型のフクロウである。夜行性によりほとんど姿を見ることはないが、鳴き声はホウホウと二声ずつ寂しく鳴くのでわかる。フクロウはホウホウコロクトホウセと鳴く。これらの声を聞けば翌日は晴天だといわれている。

ヒヨドリ　俗にヒヨという。秋になると人里に下りてナンテンやヤツデの実を餌とする。

オオルリ　夏鳥として飛来。ウグイスとともに三大鳴禽の一つ。

ヤマセミ　ダム環境調査でも確認されていて、湛水されても採餌行動の範囲は狭められる程度だと報告されている。環境庁も貴重種として指定している。崎山地区にも見られる。

ツグミ　当地方ではカチとも呼ばれる。秋になると北から渡来して翌春帰ってゆく。森に餌が無くなると人里へトり木の実や熟柿、餌台にもつく。猟鳥であるが霞網で捕らえることは禁止されている。

㈣　水辺に見かけるもの

カイツブリ　潜水が得意、湖沼や緩やかな川の澱みに生息。今川でもよく見かけていたが水量が少なくなったのか最近は少ない。別名ニオともいう。

カワセミ　清流や池の近くに棲み土手に穴を掘って巣をつくる。ヤマセミの仲間で、ダム環境調査でも貴重種として確認されている。

カワラヒワ　右同様、確認されている。

カワガラス　同前、羽の色が黒いのでこうした名前をつけられたが、普通のカラスとはおよそ縁遠い種類である。山地の谷川のほとりに生息している。水にもぐったり水上すれすれに飛んでゆく。

シラサギ　サギ類の一般総称したものでその種類は多く、町内に見受けるのは、コサギ・ダイサギ・アオサギ・アマサギ・ゴイサギなど。最近こうしたサギが水辺や水田をあさる姿が多くなった。ゴイサギは夜行性で餌を求めるときは水辺だが普段は山林の樹上に巣をかまえ、汚物や臭気で一山を荒らす。アオサギは少し大型で花熊附近でよく見かける。

カモ　北方から冬鳥として渡来する。種類も多くコガモ・マガモ・ヨシガモ・ヒトリガモ・カルガモなどである。なお先年本庄池に二六六羽のヨシガモを数えたことがあると、信用金庫支店長の下田氏が教えてくださった。オシドリもカモの一種で本町内で見たという。

カモメ　冬鳥として渡来する。元来は海鳥であるが最近は今川下流から段々足を延ばして、柳瀬・崎山までもその姿を見かけるようになった。ユリカモメの群れの中にも、ウミネコ鳥も交じっているかもしれない。

ガン　以前は群れをなして空を飛んでいたが最近あまり見かけない。

コハクチョウ　本庄池に二〇年前ごろ泳いでいたがその後死亡したと聞く。

三　昆　虫　類

まずダム環境調査結果を紹介しよう。それによると、調査地域の植物相が単調なために、山地性昆虫類の種類数・個体数ともに少なく、出現種の大部分は福岡県の平地から低山地にかけて広く分布している普通種として次のものを挙げている。

ウスバキチョウ・オンブバッタ・クサギカメムシ・ツクツクボウシ・ツマグロヨコバイ・ヒメコガネ・クロウリハムシ・イチモンジハムシ・キチョウ・ブドウスズメ・トビイロケアリなど四八六種

貴重種として、オオムラサキ・ゲンジボタル・クロセセリがあるが、これらも周辺部に生息に適した環境があるので個体数のわずかな減少にとどまるものと考えられる、と報告されている。

右のように四八六種の中に含まれる、よく見かける昆虫を列記する。

カブトムシ・カミキリムシ・クワガタ・コガネムシ・オサムシ・セミ・ミノムシ・マツムシ・スズムシ・アリ・ハネアリ・カマキリ・キリギリス・コオロギ・クツワムシ・テントウムシ・トンボ・チョウ・ハチ・アブ・ブヨ・ウンカ・カゲロウ・ケラ・カメムシ・ヘヘリムシ

人家の内外に見られるものは、ノミ・シラミ（これらは今ほとんどいなくなった）・カ・ハエ・ガ・コクゾウムシ・コメツキムシなど。

水辺で見かけるものは、ゲンゴロウムシ・ミズスマシ・アメンボウ・ハムシなど。

四　爬虫類・両生類

爬虫類・両生類についても、ダム調査で左のように報告している。

棲息しているのは、アオダイショウ・シマヘビ・カナヘビ・トカゲ・イモリ・ヤモリ・ヒキガエル・アマガエル・カジカガエルなど一六種とある。特にカジカガエルは伊良原地区の象徴動物であり、犀川町としてもこれは天然記念物的な存在である。カジカは流水性のためダムができ